

吊丸山少尉 并序 : 文苑

著者	秋月, 胤繼
雑誌名	龍南會雜誌
巻	45
ページ	51-52
発行年	1896-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/4890

逢ふ事はれもひ絶ぬるあかつきもわかれし鳥の音にぞ泣かるゝ
再ひあふ事は、おもひ絶えぬるあかつきもわかれし時の鳥の音に、今も泣かるゝ
となり、男女の戀の情のみならず、男子も千載の一遇、一たび去りて、再びあひがた
き、その時の事をれもひ出づれば、此の情抑へがたからん、音になくといひ、音をの
こどなくといふなどは、皆音を立てゝ鳴く、音にたてゝのみ鳴くといふを、省きた
るなり、こゝも、音にたてゝ泣かるゝといふを、鳥の音にいひかけゝるなり、あかつ
きものものは、わかるゝ時泣きしに對してなり、

(未完)

吊丸山少尉

并序

在文科大學 秋月胤繼

明治二十八年五月、王師討臺賊、賊勢猖獗、乃命第二師團赴援之。師團以十月十日、
上陸番仔崙、翌十一日激戰于加冬脚。余再從弟丸山少尉奮戰死之。

蠢彼小醜一何頑。黑旗成隊擁雄關。王師精銳雖無比。持久屯在瘴霧間。廟堂赫然決大策。
一舉將殲此舛逆。嚴令下第二師團。東北健兒稱無敵。時維孟冬旬日晨。天兵方下番仔崙。
仔崙東去加冬脚。此是臺東三面門。虜不扼我於濱海。可知要衝守亦怠。乃派中隊略其城。
不料頑兵邀我待。城臨渺々曠野中。易於守兮難於攻。上官已下進擊令。何問地勢通與窮。
隊長一呼分二隊。先命前半衝賊塞。塞前扼我二重濠。堰水濠內爲妨礙。健兒見之太激昂。
奮然躍入濠。一方何圖水底乃深泥。全沒胸腹及其吭。身膠泥中不得出。精兵雖猛施無術。
壘上亂射彈。雨飛猛士空斃一又一。後半一隊怒赫兮。吶喊赴援似虎犀。喊聲忽止是何事。

少尉勇烈之狀躍出
初表

爲國家惜之

豈料後隊亦陷泥。壘上見之射加劇。中隊危機迫咫尺。欲進不可退。不可進。退維谷。奈困厄。忽然揮劍。塵者誰。金線一條。颯爽姿。疾呼先登。攀壘意。氣衝天。烈於獅。飛丸戛然來。洞腹。泰然不屈。愈攀。轟他彈。再來又貫胸。氣雖猶猛。奈重創。血迸創口。無由支。忽見戎衣紅淋漓。空飲熱淚。墜壘下。我事畢矣。復何悲。臨終不覺長太息。曰。恨不生平。殘賊士卒。見之皆爲裂。勢如猛虎。爭攀陟。是時適會援兵來。一舉攻擊。賊壘摧。醜虜巢窟。望風陷。臺南瘴烟。此全開。戰報飛傳。到京府。爭稱少尉血戰苦。身受二丸。猶昂々。使人凜然。毛髮豎。嗚呼。偉哉。少尉忠。嗚呼。卓哉。少尉功。櫻兮。僅綻花一朵。可惜飄零。一陣風。君生會津。若松里。名稱重。吉丸山氏。於余同年同族親。少時追隨。呼汝爾。憶曾同學。家君庭。紡文績。學雪與螢。少壯夙志。干城任。今歲業成名聲馨。偶遇臺賊抗王命。忽有師團出征令。臨行寄予決意書。至誠之氣。筆端迸。少尉忠。孝出天資。男兒報國。此斯時。一身殉國。輕於毛。部卒授命。復奚疑。嗚呼。強將之下。無弱卒。聞君偉績。氣發越。一死不朽。傳芳名。功烈千古。赫日月。

善叙當時形狀筆々勇健與少尉忠烈爭光輝斯詩而後可以吊少尉也

二月十三夜

南摩綱紀妄評

筆路自在不覺有韻可謂傑作

老毅

賀矢野梅庵翁辭

松露生

冰肌玉骨百花魁。占殿寒英籬下開。眉壽南山長可比。歲寒晚節並高哉。是余之所嘗題陶靖節也。今乃可以移賀梅庵矢野翁矣。嚮幕府之失政。各國志士東奔西走。粉骨碎身或以